



危うい「反対」の道是

無責任で場当たり的な動燃に翻弄され続けた自治体と道民



1984年、動燃の事業所で発生するすべての放射性廃棄物を道北の幌延町に持ち込む「貯蔵工学センター計画」が浮上。危機感をいだく地元・周辺市町村の酪農民らが初の住民集会を開いた(85年11月、幌延町内)

北海道電力泊原発の再稼働をめぐり、鈴木直道知事が12月中に容認・同意する流れになつてゐるが、これは核の「ゴミ(高レベル放射性廃棄物)」の元になる使用済み核燃料をさらに増やし続けることを意味する。最終処分地の選定に向けたNUMO(原子力発電環境整備機構)の事前調査をめぐり「現時点では反対」とくり返してきた知事は、果たしてどこまで「核の「ゴミ」の発生源まで遡つて問題点を考えているのか——そう疑問の目を向ける道民は少なくない。そこで今回から、1960年代に始まる本道での原子力関連施設の立地問題について、その歴史をたどりたい。第1回は、80年代に動燃の「貯蔵センター計画」で揺れた、いわゆる「幌延問題」を中心にふり返る。

(ルポライター・滝川 康治)

原発を推進して「ゴミは過疎地に科学技術に幻想を抱いて先送り「原子力施設から出る放射性廃棄物の処理・処分は、いずれ科学技術の進歩によって解決するだろう…」

日本の原子力政策が始まつてから長い歳月が流れたが、関係者の間で貫しているのは、この無責任な思考パターンだ。高レベル放射性廃棄物(核の「ゴミ」)の最終処分に向けた青写真はあるが、実際には「砂上の楼

閣」。出たとこ勝負をくり返し、原子力文明とは無縁な地域に「負の遺産」を押しつける状況が続く。

1954年、故・中曾根康弘氏らの働きかけで、国内初の原子力予算が急きよ計上された。しかし、政府による「核のゴミ」の後始末に関する検討作業は手つかずで、69年に科学技術庁(現文部科学省)に検討会が設置されたのが始まり。2年後に出された簡単な報告書では、「核のゴミ」の後始末は「今後の技術開発を待つ」とどまる。

70年代に入り全国各地で原発建設

が加速した。北海道内では、67年に道が泊、島牧、浜益の3村を建設予定調査の候補地として公表。候補地から外れた浜益村(現石狩市)をはじめ、神恵内村、大成町(現せたな町)、幌延町が「第2の原発」誘致に手を上げた。このうち浜益村では、70年代に北電が原発建設用地126ヘクタールを青田買いして地域を混乱させたが、結局、建設は日の目を見なかつた(浜益村発行『苦渋20年』はます原発』参照)。

官民あげて「金のなる木」に夢を託す時代の中で、「核のゴミ」の後始末について大まかな方針が初めて提示されたのは、76年の原子力委員会専門部会の報告書だった。そこで「地層処分が有望と考えられるが、わが国においては調査研究は緒についたばかり…」と述べ、2000年ころから処分場に収納するスケジュールも書かれている。この時点では、日本が原子力開発を始めてから20年余りも経過しており、いかに後始末問題に対する関係者の関心が薄かつたのかを物語る。

当時の北海道は、岩内漁協が泊原発の建設に猛反対する中で、道が建設の積極的推進を再開した時期だ。

80年暮れ、下川鉱山で「核のゴミ、地層処分に向けた試験計画」が表面化。翌年4月、坑内で試験が始まつた(提供:名寄新聞社)

原発を推進して、「ゴミは過疎地に科学技術に幻想を抱いて先送り「原子力施設から出る放射性廃棄物の処理・処分は、いずれ科学技術の進歩によって解決するだろう…」

下川鉱山で初の核ゴミ処分試験同じ80年代に幌延は誘致の動き

原子力委員会が処分スケジュールをまとめた80年暮れ、道北の下川町で操業していた三菱金属系の下川鉱山(83年に休山)で、自治体や住民には「地層処分が有望と考えられるが、わが国においては調査研究は緒についたばかり…」と述べ、2000年ころから処分場に収納するスケジュールも書かれている。この時点では、日本が原子力開発を始めてから20年余りも経過しており、いかに後始末問題に対する関係者の関心が薄かつたのかを物語る。

当時の北海道は、岩内漁協が泊原

発の建設に猛反対する中で、道が建

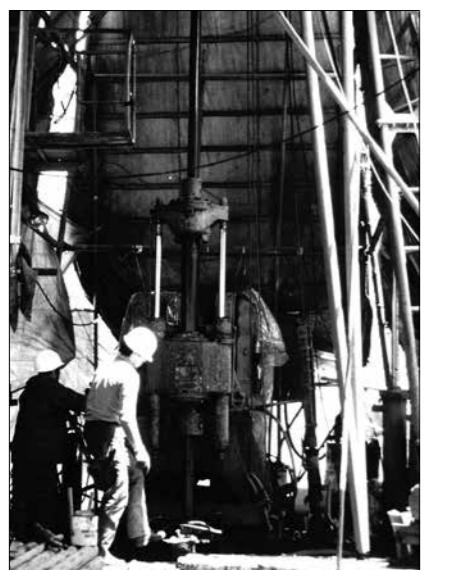
設の積極的推進を再開した時期だ。

80年暮れ、下川鉱山で「核のゴミ、地層処分に向けた試験計画」が表面化。翌年4月、坑内で試験が始まつた(提供:名寄新聞社)

原発を推進して、「ゴミは過疎地に科学技術に幻想を抱いて先送り「原子力施設から出る放射性廃棄物の処理・処分は、いずれ科学技術の進歩によって解決するだろう…」

下川鉱山で初の核ゴミ処分試験同じ80年代に幌延は誘致の動き

「(動燃の)下心としては地下研究施設(※深地層試験場のこと)がうまくいけば、次には実際の処分場の提案を考えていた」と推測していた」と述べている。



幌延町開進地区で行なわれた動燃のボーリング調査

もうひとつ、動燃の体質をよく表す資料がある。科技庁の官房長や原子力委員会の委員を務めた島村武久氏（故人）は、委員退任後の85年から94年にかけて、政策の中枢にいた政財官などの関係者を招いて「原子力政策研究会」を主宰した。21世紀になり研究会の記録が公開されたが、こんな幌延関連の島村証言がある。「幌延の計画について動燃の）吉田理事長は国会に呼び出されるまで知らなかつた。理事長が下に訊いて、ようやく知つたつて言うくらいで、動燃の一部の人が（貯蔵工学センター計画を）一所懸命やつとつたわけだ。従つて、後でいろいろ説明して理屈づけたわけですね」つまり、幌延計画は一握りの動燃

当たり的で無責任な動燃という特殊法人に狙われ、危うい状況だったのです。

住民らの地道な運動が世論喚起道議会も「設置反対」を決議する

幌延町の誘致に便乗した動燃の計画は、住民や周辺の自治体、道庁そして広範な道民から猛反発を受けた。隣接する中川町の議会が「誘致反対」を決議(84年9月)したのを皮切りに、周辺自治体では住民らの反対運動が広がりを見せていく。

酪農民たちのトラクターデモや天塩の住民グループによる札幌や旭川に出向いての「風評被害アンケート」の実施、地元議会の傍聴や請願

住民らの地道な運動が世論喚起
道議会で「設置反対」を決議する

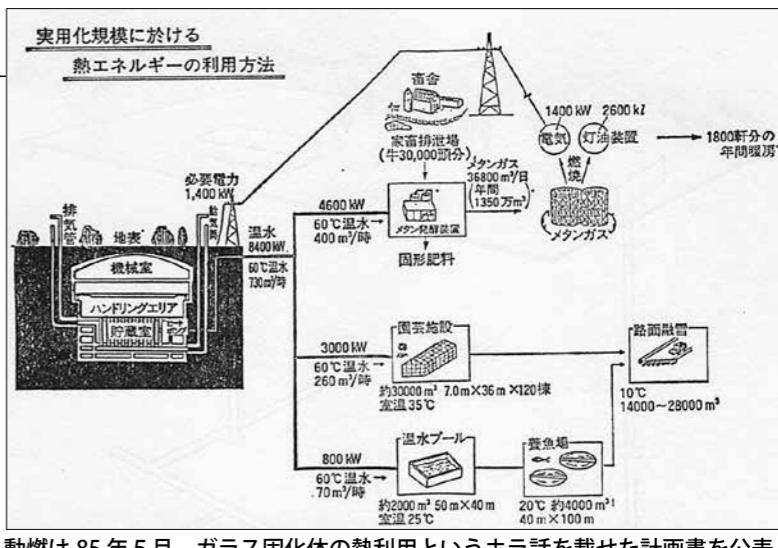
原子力船「むつ」の母港や、北電の「第2の原発」などの誘致を試みたが、いずれも空振りに終わる。

そこで、町議会の幹部が懇意にしていた本道選出の中川一郎科技庁長官(故人)から打診されたのが、放射性廃棄物施設の誘致話。低レベル廃棄物を入れたドラム缶は当時、国際条約によつて海洋投棄ができなくなり、陸上保管を迫られていた。そして82年2月、「毎日新聞」が道内でド

（計画書は短期間に2回も書き換えられた。数百度にもなるガラス固化体の熱を利用した牛糞のメタン発酵・発電施設や園芸ハウス、養魚場、温水プールなどといった荒唐無稽な構想（図を参照）も）。それらは“核のゴミ”的イメージアップを狙つた思いつきの内容である。

最終的には次の6つの施設を建設する計画になつた。

①ガラス固化体の貯蔵プラント
（固化体2千本・92年操業予定）



動燃は85年5月、ガラフ固化体の熱利用というホラ話を持った計画書を公表

ラム缶を最大120万本保管する計画をスクープ、幌延町の誘致話は広く知られることになった。

②低レベルアスファルト固化体などの貯蔵施設（TRU〔超ウラン〕素）廃棄物を含む・同）

③深地層試験場（87年ころからボーリングを開始）



年8月 道北の酪農民が初めて幌延町内でトラクターデモ

「記事の見出しへは「我が国での地層
处分は絵空事と贖罪の思いを込めて
断言しよう」とある。

現役時代の同氏は、前出の適地調
査にも従事したという。「どんなや
り方だったのですか?」と尋ねると、
「車で現場に赴き、ちょっと眺めて
歩く感じでしたね」との答えが返っ
た。一事が万事、動燃のやることは
いい加減だったのだ、と思つた。そ
の動燃に、わたしたち道民は弄ばれ

凝らした運動が続く。「55年体制」が色濃く残る当時は、労働組合の力も強く、動燃による調査着手を監視するパトロール活動も展開された。

85年11月の「勤労感謝の日」未明その監視の隙をついて動燃は夜陰にまぎれて現地踏査を強行した。調査隊5人は、幌延町役場の車で予定地の近くまで行き、そこから国鉄の線路伝いに2時間余り歩くなどして現地に到着し、地形の照合や機器類の設置位置にスプレーで目印をつける一道に対する事前通告もない卑劣



隣町内で核ゴミ施設の危険性をアピールする近隣町村の人たち (85年11月)

なやり方で、地元の酪農民のひとりが「動燃は“泥棒猫”的なことをした」と憤つたほどだ。

その後も動燃は機動隊を導入してボーリング調査などを強行し、逮捕者も出た。だが、86年に起きたチエルノブイリ原発事故の衝撃もあり、動燃が強硬姿勢になるほど反対世論が高まる展開に。調査報告書の発表は88年4月までずれ込み、その内容は立地の最終判断には言及しない、苦し紛れのものになつた。

立地計画は進まず事実上の凍結状態に陥り、焦つた動燃や誘致推進派の、二つとも、立地の言が食い、自力行

を試みた。豊富町では、90年6月の町議会で強行した「立地推進決議」の中心的役割を果たした議会幹部のリコール運動に発展し、住民投票の結果、同年11月にはリコールが成立している。

こうした経過をたどり、90年7月の道議会は自民党を除く全会派の賛成で「貯蔵工学センター設置に反対する決議」を可決した。道議会もまた、この計画に反対してきた住民や道民、道庁と足並みをそろえたのである。

(次号につづく)

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/>に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。